



やらまいか精神が生んだ、はままつ農業。

恵まれた大地に甘えず 新技術にチャレンジ!

profile

さぎさか せいいち
匂坂 誠一さん
静岡県出身
昭和42年3月 農林省園芸試験場(神奈川県平塚市)養成研修科卒業/昭和42年6月 静岡県農業改良普及員として採用/平成17年 静岡県西部農林事務所農業振興部長/平成24年 浜松市産業部農林水産政策課 非常勤職員



Inter-view

浜松の農業が誇るべきことは、何より作物品目数が多いこと。静岡県で作られる産物のほとんどが、この浜松近郊の県西部でも作られているため、「農業改良普及員が最初に勉強するには、西部で学べ。そこでいろいろな作物を学んでから各地へ赴任するのが、知識向上の近道」と言われたほどです。技術講習会を開く際も、1日のうちで、午前、午後、夜と対象作物が異なるのは当たり前。他の地域では、作物といえれば1〜2種類にとどまることが多いなか、浜松では驚くほど多くの品目を挙げる事ができるのです。

その理由は、この地域は温暖でかつ日射量が豊富なため、1年中作物生産が可能で、冬場の施設園芸にも適しているからです。また、土地は平野が多く、さらに3種類の特徴的な土質があることもポイントです。三方原の赤土では、じゃがいも、海岸付近の砂土では、たまねぎやエシャレット、天竜川付近の沖積土地帯では、セルリーなど西洋野菜や根菜類などさまざまな作物を作ることができます。

しかも、この地域の生産者は、こうした恵まれた土地に甘えているだけではなく、自ら新しい品種、新しい作物を作る新品種育成に積極的に取り組み、庄内はくさいなどのオリジナル品種を次々に育成させていきました。大正11年創設の「農事試験場蔬菜部」などの研究機関が近くにあったことが相乗作用を生み、新たな品種や栽培環境技術をいち早く取り入れ、改良を推進し続けてきたのです。まさに「やらまいか精神」の象徴といえるのではないのでしょうか。

新たなオリジナル作物の誕生を目指して…

今後の農業発展のためには、まず独自性のある地域オリジナルを作ることが必要です。他の地域で作られていないものを開発し、発達させていくこと、そのためには農業に信念を持って挑んでいく人材の育成が急務となるでしょう。

先行投資が県下でも早い浜松市では、平成4年に浜松市農業バイオセンター(北区都田町)がオープン。野菜や花などの苗について、組織培養技術を利用した研究開発を行っています。ウイルス病対策や、新技術研究を進め、浜松の農業分野をけん引してくれることを期待しています。大人気のファーマーズマーケットも、浜松ほどコンスタントに、野菜、果物、花と品数がそろい、供給されているところは多くありません。作物に恵まれた地域に暮らしていることを改めて認識し、地元の農業を応援していただきたいと思えます。

はままつ農業の「ここが肝」。

キモ

創設 大正 11年

ここが肝!

栽培技術の向上に 大きな貢献 郡立農事試験場

浜松の農業が発展した理由の一つとして、忘れてはならないのが「郡立農事試験場」の存在。大正11年、現在の浜松市南区芳川町に、農事試験場蔬菜部として創設された当時から、県下の野菜園芸・温室園芸に関する試験研究の中心機関としてスタートしました。それにより、県西部から中遠地方が、県内の野菜園芸の中心的産地と言われるほどに成長しました。昭和31年には静岡県農業試験場遠州園芸分場となり、時代ごとの特産品を中心に、品種改良、病害対策、施設改良、育苗研究を進め、地元生産者の栽培から経営におよぶ相談指導も行いながら、地域の農業振興に大きな功績を残したのです。



郡立農事試験場(遠州園芸分場時代)

はままつのはままつ農業トリビア。

農業トリビア

へちまを世界に 発信した男!

その名は織田利三郎。浜松育ちの彼は、明治中期、へちま、らっかせい、しょうがなどの特殊な農産物に目をつけ、生産力を高め、輸出振興を進めた人物です。明治33年パリ万国博覧会では、浜松特産のへちまをPRするため、へちまで作ったゾウを展示し、好評を得ました。明治40年には「静岡県生姜、糸瓜、蕃椒、落花生同業組合」を設立し、生産研究を急成長させていったのです。耐病性へちま品種に「浜名、天竜、浜北、あきは」など、当地ならではの名称がつけられているのは、彼が国内外へ地元農産物を発信し、影響を及ぼした成果といえるのではないのでしょうか。



工事期間 32年

ここが肝!

実りある大地のために 三方原用水

三方原用水は農業発展に大きな影響を与えました。明治時代に金原明善が提案していた、天竜川から台地に引水する案が、実際に着手されたのは昭和33年。当時、水利面で孤立していた三方原台地へ、安定した農業用水を確保する目的でスタートしました。それから平成2年度まで、なんと32年の年月を費やして、三方原用水の整備をすすめて、三方原台地から遠州灘までの畑地、茶園、水田を潤してきました。この大事業によって、蛇口をひねれば安定供給される農業用水が確保され、浜松市は県を代表する一大農業地帯へと成長することができたのです。名産、三方原ばれいしょも三方原用水がもたらしたものの一つと言えるでしょう。



三方原用水の通水式(昭和42年)

農業トリビア

洋菜7品目

昭和30年代、ビニールハウス技術による施設化の進歩で、浜松では洋菜生産が飛躍的に成長。昭和38年に浜松洋菜協議会が設立されたことも追い風となり、当時、西洋野菜の品種、施肥、育苗などの研究が飛躍的に進歩しました。また、それまでバラバラだったセルリー、パセリなど7種の代表野菜を「洋菜7品目※」としてセットして出荷。一つの産地で一度に収穫し、まとめて供給するという利便性が市場関係者に大きく評価されました。これらのことが、農産物供給地として浜松の市場での地位を高めました。



※洋菜7品目/セルリー、パセリ、レタス、花野菜、ブロッコリー、レッドキャベツ、芽キャベツ